平成３年度購入資料紹介　黒漆桐文蒔絵行器ほか

高　橋　隆　博

黒漆桐文蒔絵行器

『日本釈名』に「行器（ほかい）　外行也、いはいく也、ゆくと通ず、物を入て、ほかへゆく器也」とあり、また『倭訓栞』に「ほかい　行器をいふ、江次第に外居と書り、足の外のそりたるをいふにや、大外居も見ゆ」とあり、「行器」を「ほかい」と訓んだことがわかる。ただ、『延喜式』や摂関家の家産組織をうかがわせてくれる「執政所抄」、あるいは『今昔物語』では、「行器」ではなく「外居」の字を用いている。

「行器」の使用方だが、『空穂物語』に「きぬきたるおのこ、ゆたんおほいたるだいすえたる、ほかいもたせておもうく」と、『今昔物語』には「知タル人ノ許ニ、飯一盛、湯一提ヲ乞ニ遣リツ、暫時有テ外居ニ飯一盛指入ノ坏具シテ、提ニ湯ナド入レテ持来ヌ」とあるので、「食物」などを入れて運ぶ屋外で用いる器具として使われた。

『春日権現験記絵』や『一遍聖絵伝』をはじめとして、中世の絵巻物には数多くの「行器」が描かれており、ごく日常的に使用されたことがわかる。絵巻物をつぶさに観察すると、かならずしも食物器具としてのみ用いられたばかりでなく、さまざまな物を入れる運搬具であったようである。しかし、絵巻物は内容品の一切を描いていないので、何を入れたものかはこれ以上はわからない。また「行器」はかならず一対が朽（りき・りょく）で肩に担がれているので、これが当時ごく一般的な運搬法であったようである。

なお、絵巻物に描かれるほとんどの「行器」が、いわゆる「曲物」で、そこには加飾文様はほどこされていない。漆塗りや文様をつける「行器」が登場するのは、もう少し後になってからのことであり、おそらく桃山期ごろからであろうか。

さて本作品だが、総体を黒漆塗りとし、いささか外に張り出した四脚を付けた、四角柱形の行器である。蓋の表は、円文の中に大振りな「五七の桐文」を、それぞれ金の平蒔絵であらわしている。蒔絵の技法は、絵梨子地・付け描き・描き割りを駆使しており、さらに左右の桐の花がやや外側にひろがりを見せるなど、典型的な桃山期の特徴を示している。なお、四脚のそれぞれに蒔絵の桐文を三個ずつ配し、脚の底部には金銅素文の脚飾をつける。

本作品にみられる文様・蒔絵技法は桃山期から江戸初期にかけて一時代を画した「高台寺蒔絵」とよばれているもので、その名称はいうまでもなく、京都東山の臨済宗建仁寺派の鷲峰山

黒漆桐文蒔絵行器　高さ37.0cm、径29.0cm

行器の上蓋

高台寺に由来する。高台寺は豊臣秀吉の妻高台院の願望により徳川家康が創建した寺院で、「高台寺蒔絵」とは同寺に伝来した豊太閤夫妻遺愛の蒔絵調度品や霊屋の厨子扉にほどこされる文様・技法に由来する漆芸技法のことである。

幔幕桜金銀蒔絵行厨　高さ32.0cm、径32.5×18.5cm

江戸時代の百科辞典である、寺島良安編著の『和漢三才図会』に「食盒　提盒　俗云佐介知字波古（略）提盒今云提重箱近世製甚精美、三四重層□餅酒肴以可提携者、舟逍遙野遊等、行厨提盒必要之器」とある。「さげじゅう」とは、肴物などの食べ物を入れる「折」（室町期にはこの名称が使われている）を三段・四段と重ねた、いわゆる重箱のことで、これを運ぶところからこの名がある。そして、この重箱に酒器の徳利、取り皿などを加えて、さらに持ち運びを便利にするために把手付の台枠をつけたものが行厨（こうちゅう）である。つまり、肴物入れの重箱や酒器などをコンパクトに組み込み、野外での物見遊山に際して携帯した弁当箱である。提重とか花見弁当ともいわれる。

行厨がいつの頃から使われだしたのかはっきりしない。ただ、外箱に「慶長十三年」(1608)の銘のある「花鳥密陀絵行厨」が現存しているので、少なくともその頃には使用されていたとみるべきであろう。遺品からうかがうに、桃山期のものはきわめて少なく、そのほとんどは江戸期も元禄以降の作である。このことは、画中資料のおいても証明できるところである。なお、「重箱」についてもその出現時期は確定できない。『骨董集』によれば、「重箱は慶長年中、重ある食籠にもとずきて、始めて製造すといへるは、うけがたし、今按るに、重箱は衝重の遺制なるべし」との説を紹介してはいるが、すでに室町期の狂言に「まき絵の重箱に、色々の肴を入れて」とある。

本行厨は、咲きほころぶ桜花と雷文・輪違い文・波文・小葵文幔幕を梨子地・付け描きを駆使した金銀蒔絵であらわしている。人物の一人だに見えないが、幔幕の内では酒宴はなやかであることをすでにして暗示するに充分である。錫の徳利一対と一枚の少し大型の皿と小型の五枚の皿をつける。江戸中期を下らない作品である。

幔幕桜金銀蒔絵行厨　高さ32.0cm、径32.5×18.5cm

竹林七賢金蒔絵硯箱

「竹林の七賢」とは、中国の晋時代に世塵をさけて竹林に会し清談をもっぱらにした七人の隠者、つまり阮籍・嵇康・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戒の称である。淡い竹の色調は深山幽谷を暗示するし、七賢人の姿態は一様ではなく、書き物をめぐっての緊迫した場面を見事にとらえている。衣装の一部と被り物、書き物は螺鈿を用いている。蒔絵は薄肉盛り、付け描きを用い、地は銀梨子地。蓋裏には牡丹に蝶を金蒔絵であらわしている。

竹林七賢金蒔絵硯箱